

## 2005年度中等教育研究協議会

藤田 高弘

**【抄録】** 今年度の中等教育研究協議会は、研究開発6年目（継続3年）の総括としての協議会である。協議会主題は、「青年期のキャリア形成につながる学びの力」と設定した。このような主題設定をした理由は、「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発と主体である生徒の学びの力を総括するためである。研究開発継続6年目の総括として、これまでの教育課程開発による教育実践が生徒のどのような学びの力を育もうとしているのかを研究会で発表し、分科会でその成果と課題をまとめる協議会とした。そこで、青年期のキャリア形成に焦点を当て、「併設型中高一貫カリキュラム」の成果と課題を、外部評価も取り入れながらまとめた。

**【キーワード】** 青年期のキャリア形成、学びの力、高大連携、中高一貫教育課程

### 1 中等教育研究協議会総括

#### 1) はじめに

研究主題を「青年期のキャリア形成につながる学びの力」と設定し、サブテーマとして「多角的なアプローチを通して」とした。本校は、併設型中高一貫校として総合的な学習（総合人間科）をはじめ、新しい教科（ソーシャル・ライフ、心と身体の科学、自然と科学、国際コミュニケーション学、平和と共生の科学）、選択学習（中学各教科を中心とした選択学習）、大学連携（学びの杜）、特色ある教科学習（英語・数学の基礎基本）等で教育課程の開発に取り組んできた。研究開発継続6年目の総括として、これまでの多角的な教育実践が生徒のどのような学びの力を育もうとしているのかを研究会で発表し、分科会でその成果と課題をまとめ、学校で身につけるべき力を検証した。本稿では、研究開発の主要テーマである「キャリア形成と学びの力」に焦点を当て総括とした。また、今年度から初めて他校からのピアレビューを実施し、研究開発及び研究協議会の外部評価を実施した。その内容を簡潔にまとめ、中等教育研究協議会の総括とする。

#### 2) 青年期のキャリア形成に資する「併設型中高一貫カリキュラム」の評価と課題

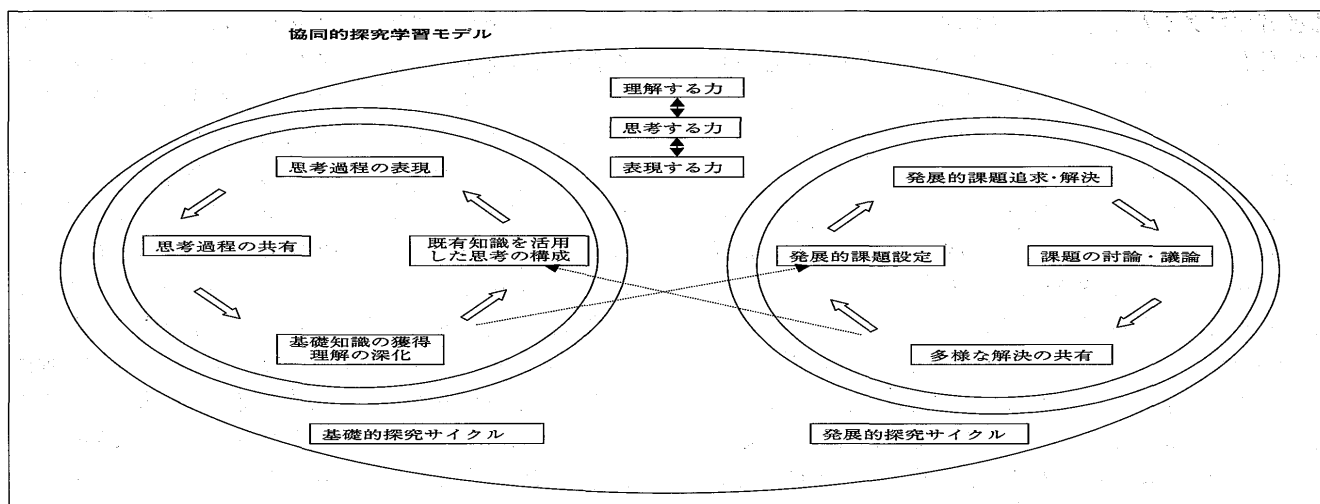
平成12年度からスタートした併設型中高一貫カリキュラムが今年で6年目になる。総括的な評価として、キャリア形成と中高一貫教育という軸からカリキュラム評価を試みたい。特に、研究主題である「キャリア形成」と「学びの力」の関係を明らかにしながら、1) 中心となる教育プログラムがどのような役割を果たしてきたのか、2) 中等教育という現場で「キャリア形成」を中心に置いた教育課程開発の教育実践を行うことの意味に焦点を当てまとめにしたい。

21世紀型学びの力として「生きる力」と「確かな学力」

が求められる教育状況の中、本校は併設型中高一貫校として、総合的な学習を軸に「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発に取り組んできた。その教育実践研究の中で、青年期のキャリア形成の特質として三つの要素を明らかにしてきた。

- 1) 多くの人との出会いや多面的な学習から自分の興味・関心が何かを探る「**個性的自立のキャリア**」
- 2) 豊かで多面的な学習環境の中で自分の学習を跡づける「**学びのキャリア**」
- 3) 人や社会とのかかわりの中でともに学び合いながら、将来の自分の生き方について考える「**自覚的なキャリア意識**」

このようなキャリア意識の形成を通して生徒一人一人が自分自身の将来を自覚的・自立的に「生き方」を選択していく教育実践を行ってきた。また同時に、キャリア意識の形成につながる「学びの総合力」の育成に取り組んできた。つまり、必要な知識の本質的な理解、学んだ知識を生きた知識として活用する思考力、適切かつ効果的に伝える表現力、豊かな対人・社会関係能力、深い動機付けをともなった学習意欲といった観点から生徒の学ぶ力を育ててきた。中等教育段階でのキャリア形成を育む「学びの力」を設定し、構造化した（参照：カリキュラムと学力評価のページ）。このような「学びの力」を設定することによって、学校で育む力の中で知識中心の学力観だけではとらえきれない力を提示した。学校で育む学力を4つの側面を設定した。その4つの側面とは、認知的側面、技能的側面、情意的側面、そして価値・態度的側面である。認知的側面には知識・理解という領域があり、その知識・理解とは、「知る」、「わかる」という言



業で、技能的側面には習熟・活用という領域があり、その習熟・活用とは、「できる」という言葉で、情意的側面には関心・志向・という領域があり、その関心・志向とは「引かれる」、「むかう」という言葉で、価値・態度的側面には関与・共感という領域があり、その関与・共感「関わる」、「共に感じる」という言葉で、それぞれ表現できる学力の側面と言える。

キャリア意識の形成につながる「学びの力」の育成では、有機的なつながりを持った知識・理解を育てながら、思考力、判断力、分析力へとつなげたり、確かな知識に基づき活用する技能を高め、創作力の育成を目標にしている。ものごとを共感的、多面的にとらえる価値や態度を育みながら、また深い動機付けや効力感をともなった意欲を育てながら、探求力、共感力、継続力を育成する。さらに、ものごとを多面的に観察し、人・社会・環境に対する適切な自己認識を培いながら、人や社会への関係形成力、関係調整力へとつなげることも目標にしている。このような多角的な学びの力をキャリア形成につながる「学びの力」として位置づけているのである。

また、学びの力の中心となる理解・思考・表現力を育む学習方を提起した。キャリア意識の形成につながる学びの力を育成する教育プログラム（総合人間科、選択プロジェクト、ソーシャルライフ、基礎英語・基礎数学、新教科群）、学びの杜・学術コース）で有効と考えられる学習方を整理する目的で、協同的探究学習モデルを提言した。

この学習プロセスにある協同的な基礎的探究サイクルでは、学習者の既有知識の活用や思考過程の表現・共有を通して、知識の獲得と理解を確かなものとする。協同的な発展的探究サイクルでは、獲得した知識と理解をいかした発展的課題設定、深い多面的な課題追求と課題解決を通して、生きた知識を活用し、理解を深化させた多様な解決法の共有を通して、多元的なより深い思考力を育成する。

このような学習サイクルが、本校の教育プログラムに

おいてどの程度有効なのかを客観的に評価したり、一般教科に適用可能なのかを今後検証していく必要がある。

併設型中高一貫校におけるキャリア意識の形成を育む教育実践を通して言えることは、中高6カ年の発達段階に応じて「縦軸として、キャリア形成を育む学習を展開できる」ことにある。反復練習、暗記中心だけの学習では築くことができない「キャリア形成につながる学びの力」を中高6カ年のゆとりの中で「ゆっくりと多面的に形成する」ことができるのである。その学びの力とは、人や社会との関わりを考えながら、自分の頭で深く考え、取り組むべき課題やテーマを見つけ出し、解決しようとする学びの力である。今回附属で設定した8つの力に照らし合わせて言うならば、必要な知識の本質的な理解、学んだ知識を生きた知識として活用する思考力、適切かつ効果的に伝える表現力、豊かな対人・社会関係能力、深い動機付けをともなった探究力といった生徒の学ぶ力でもある。このような「キャリア意識の形成につながる学びの力」を育むために、「横軸として、本校独自の多面的な学習」が用意されているのである。つまり、その多面的な学びの機会として、キャリア意識形成の核となる「総合人間科」、各教科を中心に広く、浅く興味・関心を育む「選択プロジェクト」、人間と社会の関係構築スキルを磨く「ソーシャルライフ」、数学・英語の基礎を築く「基礎英語・基礎数学」、教科をつなぎ多元的な思考力を育む「新教科群」、高校と大学との学びをつなぐ「学びの杜・学術コース」という教育プログラムがある。

研究主題である「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発の総括として、青年期のキャリア形成につながる学びの力に関するアンケートを調査を実施した。カリキュラム評価の一貫として、キャリア形成につながる教育プログラムの目標とその目標に対する学びの力を設定し、それぞれの学びの力に対応するアンケート項目を作成し、アンケート調査を実施した。その結果を次に示す。

この結果から解釈できることは、研究開発の中心とな

る教育プログラムである総合人間科、ソーシャルライフ、新教科群、学びの杜・学術コースでは、生徒の自己認識レベルではあるが、目標に対応する学びの力を総じて高く評価している。つまり、各教育プログラムで設定した目標の達成度は概して高いと考えられる。

そこで、どのような学びが展開されてきたと学習者自身が認識しているのかという視点から、生徒の自由記述アンケートをもとに整理してみた。そこで、明らかになってきた内容を以下にまとめた。

「自主性」という言葉がキーワードとなっている。つまり、主体的な学びである。より具体的には、自主的な学習、探求や、思考といった学習が展開されていると認識しているのである。あくまで自己認識として判断しているので、自主的な探究や、思考がどの程度かはっきりしない。しかしながら、自問自答的な学習を通して、自ら考え、自ら解決していこうとする「自立的な学習」をしていると生徒は認識しているのであろう。教育プログラムの中でも特に、総合人間科、新教科群での学習でこのように認識している傾向が見られる。

次なるキーワードは、「多様性」という言葉である。1つの課題や問題を多様な観点から知り、多面的に考える力を身につけていると認識しているのである。「問と答え」という一対一の対応で考えるのではなく、1つの課題を多様な視点から考え、多様な解を出すことができると見なしているのである。特に、総合人間科、新教科群、学びの杜・学術コースでの学習でこのように認識している傾向が見られる。

さらに、「関わり」というキーワードがある。人や社会の関わりの中で学ぶという学びのスタイルを意識しているということである。自分の考えや意見を表現し共に考える学習過程を通して、知識の獲得や理解を深め確かなものとしていくことができると認識しているのである。また、現在学習していることが、これからの自分の学習とどのようにつながり、さらに社会の中でどのように関係しているのかということを理解し、考えながら学びを創るといった認識を持っているのである。ソーシャルライフ、総合人間科、新教科群、学びの杜・学術コースといった教育プログラムでこのような傾向が見られる。

既存教科の一部に自己認識レベルで低い評価をしている学びの力があるが、既存教科においても「自立的な学びの力」、「多様な観点から考える力」、「協同的な学びの力」、「社会と関わる力」を育む観点から学習シラバスを創造したり、授業を構築することが今後の課題である。既存教科の指導法としては受信型と発信型の学習法をバランスよく取り入れたり、抽象的な内容を学習者の発達段階に応じて具体的に学習させたりすることを通して、教科内容の本質的な理解や、学んだ知識を活性化させ生きて働く知識を学ぶ教科学習へと向かう必ことが今後の課題として残る。

最後に、中高一貫校で「キャリア形成」を中心に置いた教育実践をすることの意義は、中高6ヵ年のゆとりの中で「ゆっくりと多面的にキャリア形成につながる学びの総合力を育成できる」ことにある。つまり、多くの人との出会いや多面的な学習から自分の興味・関心が何かを探りながら、豊かで多面的な学習環境の中で自分の学習を跡づけ、将来の自分の生き方について人や社会とのかかわりの中で、ともに学び合いながら自分自身の将来を自覚的・自立的に将来の「生き方」を選択して行くことにある。その過程の中で、必要な知識の本質的な理解、学んだ知識を生きた知識として活用する思考力、適切かつ効果的に伝える表現力、豊かな対人・社会関係能力、深い動機付けをともなった探究力といった学びの総合力を身につけていくのである。

## 2) 外部評価としてのピアレビュー

中等教育研究協議会当日に参加した奈良女子大学附属中等教育学校、東京大学教育学部附属中等教育学校の先生方より、本校の研究協議会での公開授業、各分科会に対して成果や課題を外部の視点から明らかにしていただいた。今回のピアレビューは初めての試みなので、公開された授業と分科会に焦点化して実施した。その報告を本校独自の教科（新教科、ソーシャルライフ）、既存教科、青年期のキャリア形成に資する教育課程のそれぞれの成果と課題を要約して報告する。但し、全ての公開授業、全ての分科会についての参観と評価がなされていないことを前提に報告する。

### 1. 新教科（平和と共生の科学、自然と科学、ソーシャルライフ）の成果と課題

#### 成果

- 生徒の主体的な考え方が展開される授業となっていた。
- なごやかな学習集団が形成されている中で、高度な内容を学習していた。
- 大学と連携して作成したワークをうまく取り入れて授業展開している。
- 生徒が積極的に参加し、授業を大切に感じている。

#### 課題

- 生徒の思考や主体性を重視する授業展開では、考えさせる内容、考えて欲しい内容を授業者自身が明確にしておく必要がある。
- 参加型のワークで、生徒の生活実感と結びつかないところもあり、授業の目標とのつながりに改良の余地がある。
- 教育課程上の位置づけにおいて、例えばソーシャルと道徳との違い、新教科群と既存教科との関係や、位置づけには検討の余地がある。
- 新教科群が、総合と既存教科をつなぐものになっているのか。その差異、相互関係を明確にする必要がある。

## 2. 既存教科の成果と課題

### 成果

- 総合学習で目標にしている調査、発表能力を教科でも役立てたいとする意図はよく理解できた。
- クラスの良好な仲間関係が表れた授業だった。
- 総合学習と教科の関連を意図した授業展開で、生徒の学びが深まった。

### 課題

- 既存教科と学びの力がどのような関係にあるのかの整理と説明が必要である。
- TTの目的や、利点が活かされた授業展開、授業構想が必要である。
- 研究開発関連授業で目標している授業方法の何を、どのように既存教科に生かしていくのかを検証し、実践する必要がある。

## 3. 青年期のキャリア形成につながる学びの力についての成果と課題

### 成果

- 「青年期のキャリア形成」という魅力ある研究テーマを掲げ、大学との連携のもと、併設型中高一貫という特色を生かしたカリキュラムがデザインされている。
- 総合学習、新教科、学びの杜等において大学連携がうまくなされ大学附属としての特色を上手く出している。
- 教育課程の開発と評価においても、大学との協同による学力論の理論的説明がなされ、今後も継続的に取り組む環境にあり期待をしたい。

### 課題

- 高大連携を考える時、高校には高校の教育、大学には大学の教育のあり方があるので、大学連携の目的や、あり方を深く考え適切な連携方、その役割を考えていく必要がある。
- 学びの力においてアンケート結果だけではなく、カリキュラムによって生徒がどのように育つていったかを、プライバシーに配慮しつつ具体的に示す方法も考慮する必要がある。

### 3) まとめ

研究開発継続6年間の総括としての中等教育研究協議会と外部評価を通しておぼろげながら明らかになってきた重要な成果と課題を振り返ることでまとめとしたい。

本校は、併設型中高一貫校として、総合的な学習を軸に「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発に取り組んできた。総合学習を進展させ、新教科（ソーシャル・ライフ、心と身体の科学、自然と科学、国際コミュニケーション学、平和と共生の科学）、選択学習（中学各教科を中心とした選択学習）、大学連携（学びの杜）、特色ある教科学習（英語・数学の基礎基本）等で教育課程の開発に取り組んできた。

これらの教育課程の開発を通して、どのような学びの力が生徒に育ったのかを明らかにしようとした。今回の協議会に向けてのアンケート結果によると、研究開発関連の中心となる新教科、総合学習、学びの杜、ソーシャル・ライフでは、中高6カ年のゆとりの中で「ゆっくりと多面的にキャリア形成につながる学びの総合力を育成できる」機会を提供できたと言える。

つまり、多くの人との出会いや多面的な学習から自分の興味・関心が何かを探りながら、豊かで多面的な学習環境の中で自分の学習を跡づけ、将来の自分の生き方について人や社会とのかかわりの中で、ともに学び合いながら自分自身の将来を自覚的・自立的に将来の「生き方」を選択して行くことである。その過程の中で、必要な知識の本質的な理解、学んだ知識を生きた知識として活用する思考力、適切かつ効果的に伝える表現力、豊かな対人・社会関係能力、深い動機付けをともなった探究力といった学びの総合力を身につけていく機会となった。

重要な課題としては、中等教育の多くの時間と中心を占める既存教科のあり方である。今回の協議会に向けてのアンケート結果と外部評価を通して、既存教科の授業がどのような目標を持ち、どのような状況にあるのかを明らかにする必要があると感じた。特に、アンケート結果から、5段階評価の3を下回る評価が既存教科に集中している。その可能性について外部評価で、興味ある分析をしていただいた。

- 1) アンケート項目に課題があり、教科の評価が低くなるように誘導されている可能性
- 2) 既存教科では、研究開発で設定した学びの力が十分に育っていないという可能性
- 3) 研究開発で設定した学びの力が、既存教科にフィードバックされるまでに時間がかかるので評価が低くなる可能性

といった3つの可能性を考察していた。どの可能性が一番高いのかの検証は現段階ではできないし、その他の理由もいくつか考えられるが、いずれにしても研究開発関連授業で目標している授業方法の何を、どのように既存教科に生かしていくのかを十分に考察し、明らかにし、学校組織全体で共有していく必要がある。

繰り返しになるが、既存教科の学習においても「自立的な学びの力」、「多様な観点から考える力」、「協同的な学びの力」、「社会と関わる力」を育む観点から学習シラバスを創造したり、授業を構築することが今後の重要課題として残る。既存教科の指導法としては受信型と発信型の学習法をバランスよく取り入れたり、抽象的な内容を学習者の発達段階に応じて具体的に学習させたりすることを通して、教科内容の本質的な理解や、学んだ知識を活性化させ生きて働く知識を学ぶ教科学習へと向かうことが今後の課題であることは明らかである。

次に重要な課題としては、大学との連携、大学との接

続についてである。大学連携の今後のあり方については、高大接続、高大連携といった時に、「生徒の学ぶ力」からみて何を接続し、何をつなぐのかを意識する必要がある。大学の先生による出前授業による生徒の意欲・関心の向上だけではない目標や、接続改善が求められる。つまり、

1) 中等教育と高等教育をどのように区別し、関連させながら進めるか（学習の方法）

2) 高大連携を通じて、どのような力を生徒につけさせるか（学習の目標）

3) その力がついたかをどのように評価するか（学習プロセス・プロダクトの評価）

の3つの観点を教育実践を通して明らかにして行く必要がある。

附属学校で実施した「学びの力」のアンケート調査（2005年11月実施）の結果より

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
中 1	総合人間科	3.94		4.07		3.76			4.23	3.90
	ソーシャル	4.16					4.27			3.51
	社会	3.19				3.66			2.91	

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
中 2	総合人間科	3.72		3.66		3.46	3.60	3.08	3.55	3.58
	ソーシャル	3.70					3.89			3.23
	基礎英語	3.11		2.60					3.54	3.01

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
中 3	総合人間科	4.44				4.07				4.08
	ソーシャル	4.02					4.24			3.71
	基礎数学	3.38		3.42				3.61	3.09	3.91

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
高 1	総合人間科	3.61		3.78		4.08		3.69	4.04	4.16
	新教科	3.66		3.51			3.34	3.55	3.34	3.61
	学びの杜	3.83		3.00		3.49	3.91	3.70	4.06	3.78
	国語総合	3.08		2.68					2.56	
	理科総合	3.42		2.81		3.37	3.35	2.94	3.13	

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探求	⑧人や
高 2	総合人間科	3.92		3.55			3.62	3.21		3.95
	新教科	3.91		3.87			3.49	3.70	3.53	3.69
	学びの杜	3.72		3.31		3.44	3.95	3.80	3.88	3.64

		①理解	②思考	②思考	③表現	④課題	⑤自分	⑥創意	⑦探究	⑧人や
高 3	総合人間科	4.00		3.60		3.78	3.58		3.75	3.56
	新教科	3.73		3.64			3.39	3.56	3.38	3.69
	学びの杜	3.83		3.25		3.78	3.88	3.88	3.93	3.89